



〈秀人の部屋〉

プロ野球ドラフト会議 2025年



皆様こんにちは！だいぶ涼しくなってきた今日この頃ですが、お元気でいらっしゃいますでしょうか？

私は相変わらず元気にはやっていますが、なんと私、1ヶ月前に娘からうつたものだと思いますが、風邪をひきました！熱も1日だけ37.4°まで出るくらいでそうつらいわけではなかったですが、ただこれで私、馬鹿は風邪ひかないという言葉がありますから、馬鹿ではなかったことが証明されました！ありがとうございます！ほんと全然風邪ひかなかったので、ちょっと心配していたんですね～。ホッとしました(-_-)

言っていることが馬鹿っぽい私ですが、これからも宜しくお願ひ致します(^.^)



くだらない私の話はこれくらいにして、さあいよいよ10月になりました！10月と言えば…

そう！皆様お待ちかねのプロ野球ドラフト会議の季節です！(去年も言いましたが、お待ちかね？)

一昨年、昨年の10月号でもドラフト会議の話題を取り上げましたので、もうこれは恒例ということで取り上げないわけにはいかない、という使命感でまた今年もお話をさせて頂きたいと思います！



この10月号がお手元に届いている頃にはもう終わっていると思いますが、
今年のプロ野球ドラフト会議は10月23日(木)に行われます。
今号は、今年の注目選手をピックアップしてお伝えして参ります！



☆立石正広(たていしまさひろ)選手☆



内野手 180cm 87kg 右投右打 高川学園高→創価大

今年のドラフト候補選手の中で、最大の注目選手はこの立石選手ではないだろうか。右の強打者で、二塁・三塁を守れる内野手。2年春に所属リーグである東京新大学リーグで打撃三冠王に輝き、今春は5本塁打、16打点で2冠王に輝いた。今夏の日米大学野球選手権では4番を務めるなど、大学、そして今ドラフトナンバーワンバッターの呼び声高い選手である。12球団どのチームも欲しい逸材である。

☆石垣元気(いしがきげんき)選手☆



投手 180cm 78kg 右投両打 健大高崎高

今年の投手の中で最も評価が高いと目されているのが、高校生であるこの石垣選手。最速が158キロをマークするまさに剛腕ピッチャー。NPBだけでなく、メジャーからも熱視線が注がれるピッチャーで、今夏の甲子園では初戦で敗れリリーフで2イニングだけの投球に留ましたが、9月のU-18野球W杯では、150キロ台を連発。ストレートの平均球速がほぼ150キロ台で、このアベレージの高さが彼の魅力と感じであり、さらにはまだ発展途上の高校生。将来、日本を代表するピッチャーに成り得る可能性がある選手である。



☆中西聖輝(なかにしまさき)選手☆



投手 182cm 90kg 右投右打 智弁和歌山高→青山学院大

150キロ前後のストレート、そしてスライダー・フォークなどの多彩な変化球を操る本格派右腕。高校3年夏にエースとして甲子園を制覇。昨年の東都大学リーグではシーズンで8勝0敗、全国大会でも3勝を挙げ、リーグ戦・全国大会共に優勝を遂げる。今春もリーグMVP、最優秀投手に選ばれる活躍でリーグ連覇。まさに勝ちを知る、勝てるピッチャー。制球力も含めた総合力が極めて高いドラフト1位候補の選手である。



まだまだたくさんの素晴らしい選手がもちろんいるのですが、スペースの都合上、残念ながらここまで紹介となります。今年のプロ志望届を出した学生は、高校生124名、大学生176名、合計300名となりました。そこに社会人野球の選手、そして独立リーグの選手の中から、限られた選手のみが選ばれる過酷な世界。ただ、夢のある舞台もあります。そんな運命を決めるのが、このドラフト会議。多くの選手が選ばれ、そして華やかなプロの世界で成長し、活躍をしてもらいたいと切に願っています。そして、そんな選手たちを応援していきたいと思っています。さあ果たして、今年のドラフト会議、どんなドラマが繰り広げられたのでしょうか。

ASA DA通信



2025年10月

今月のテーマ

I 坂口 志文教授 ノーベル賞受賞

生理学・医学賞

II 北川 進教授 ノーベル賞受賞

化学賞

III 秀人の部屋

想いをのせて 感謝 ありがとう

2025年10月4日
自民党の総裁選で高市早苗前経済安全保障相が
第29代自民党総裁に選ばれた。

この総裁選は決選投票に持ち込まれ小泉進次郎議員と高市議員の投票結果で決まった。

高市早苗185票、小泉進次郎156票となつた。

自民党結党以来女性初の総裁が誕生したのである。

翌日の日経平均は4万8000円超となった。東京株式市場で株価は一時上げ幅2200円を超えて、史上初めての高値をつけた。

10月5日～総裁決定の翌日民法テレビでは、高市氏の「粗探し」発言が目立つた。

10月8日今年参議院議員となつたk議員は、報道陣の一部が自民党の高市総裁に関し「支持率を下げてやる」と発言したとされる動画がSNSで拡散されている

問題について「これがメディアの本質だ」と不快感を表した。k氏は動画を添付した上で「高市さんに対し、ありとあらゆる理不尽な攻撃が続くだろう。しかし、その攻撃は日本の民主主義を破壊し、日本そのものを破壊しようとするものである」と発言した。



久しぶり 笑顔は出るが 名前出ず



信頼と実績で皆様に愛されて38年！

生命保険・不動産の売却・買い取り すべてお任せください！



株式会社
オフィス ASA DA

住所：〒302-0015 茨城県取手市井野台1-7-28 E-mail：officeasada220@gmail.com
TEL：0297-72-2401 FAX:0297-72-6217 URL：https://officeasada.com

代表取締役 麻田 春江



k氏が添付した動画では、報道陣が「支持率を下げてやる」ほか「支持率を下げるような写真しか出さねえぞ」「裏金と靖国なんかでしょ」と話している声も聞こえた。危険なのは、テレビでコメントーターが話している事は全て本当だと思ってしまうことだろう。

一方、27年間連立を組んでいた公明党は総裁に小泉進次郎議員がなつたとしたら離脱したのだろうか？疑問が残る。私達は眞実はどこなのか誰なのか見抜く目を持たない知らない時代になつていると捉えることが大事と感じた。

2025年4月13日～10月13日の67日間開催
『大阪・関西万博』が幕を閉じた。

史上初めて四方を海に囲まれた人工島で開催された国際博覧会だった。開催前に、有名なコメントーターが散々指摘をしていたのがつい最近のように思える。大屋根リングなどいらない、絶対赤字になるなど…。結果、大きな建物、大屋根リングは多勢の人が屋根に乗って楽しそうにしていた。この万博のシンボルは大人気だった。

この博覧会のテーマは『いのち輝く未来社会のデザイン』折しも開催場所は、大阪湾に浮かぶ人工島。島の名は夢洲(ゆめしま)での開催だった。

当初の見解は、技術革新や経済効果への大きな期待を背景にしたものだった。しかし、様々な要因で費用面や運営面の計画を大きく変更せざるを得ない状況が続き、開催そのものが危ぶまれた。

結果は、日本と158カ国・地域が参加した。

入場数は2507万7601人に達した。公式キャラクター『ミヤクミヤク』のグッズ販売も好評で、運営収支は230億円～280億円の黒字となるようだ。

2030年開催のサウジアラビアの首都リヤドに万博旗が引き継がれた。閉会式は涙ぐむ人、名残惜しいという人も多くいたようだった。

いろいろ指摘することより、みんなで盛り上げて成功するように協調する発言が良いと思うが…。

I 坂口 志文 大阪大学特任教授 ノーベル賞受賞 生理学・医学賞

免疫反応抑える細胞発見 がん・糖尿病 治療に道を開いた

スウェーデンのカロリンスカ研究所は6日、2025年のノーベル生理学・医学賞を大阪大学の坂口志文特任教授(74)、米システム生物学研究所のメアリー・ブランコウ氏(64)、米ソノマ・バイオセラピューティクスのフレッド・ラムズデル氏(64)に授与すると発表した。

坂口氏は免疫反応を抑えるブレーキ役となる「制御性T細胞」を発見した。アレルギーや1型糖尿病などの自己免疫疾患、がんといった病気の新たな治療法の開発に道を開いた。



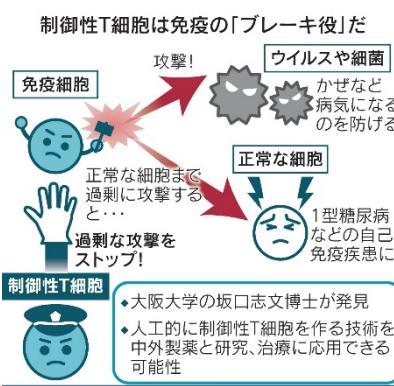
記者会見する大阪大学の坂口志文特任教授

授賞理由は「免疫の抑制に関する発見」。

坂口氏が発見した制御性T細胞は免疫細胞の活動を制御する役割を担う。免疫はウイルスや細菌など外敵と、自分の体をつくる細胞を区別し、外敵だけを排除する仕組みだ。

しかし、自分の細胞と外敵をうまく区別できなくなると、自分自身を攻撃して傷つける自己免疫疾患になってしまう。制御性T細胞は異常な免疫反応を抑える。

米国の2氏は自己免疫疾患に関わるFoxp3という遺伝子を発見した。後に坂口氏らはFoxp3が制御性T細胞の成長や働きに欠かせないことを突き止めた。



坂口氏は京大在学中、胸腺という臓器を取り除いたマウスが自己免疫疾患に似た症状を起こすとの研究報告を読んで興味を持ち、研究を始めた。

免疫細胞の一種であるT細胞の中には免疫の暴走を抑えるタイプが存在するのではと思いを深め研究に没頭した。

こうした細胞の存在を疑う研究者も多く逆風にさらされたが、根気強く研進めて1980年代に存在がある事を発表した。95年には細胞の特定に成功し制御性T細胞の発見者となった。

研究成果の実用化に向け、阪大発スタートアップのレグセル（米カリフォルニア州）を2016年に設立した。

制御性T細胞の動きを操作すれば、ぜんそくなどの免疫が関わる病気を治療できると期待されている。

がんの治療では逆に、がん組織に集まった制御性T細胞を取り除いたり、働きを抑えたりして、他の免疫細胞にがんを攻撃させやすくする方法の研究が進む。坂口氏は6日開いた記者会見で「受賞を機会に研究が進み、臨床応用できる方向に進展するのを望んでいる」と話した。

一連の研究によって、免疫の力を操り、自らの体にできたがんの治療も期待できるかもしれない。数々の希望をもたらす研究は「人類への貢献」に贈るノーベル賞にふさわしい偉業といえよう。

日本からのノーベル賞は、24年の平和賞に輝いた日本原水爆被害者団体協議会に続く2年連続の快挙だ。

自然科学3賞では21年に物理学賞を受賞した真鍋淑郎さん以来となる。

免疫は病原体のような外敵から体を守るが、時として自らの体を傷つける。バランスを保つうえで、坂口さんは過剰な免疫反応を抑える働きをする細胞「制御性T細胞」の存在を早くから提唱していた。

新しい着眼点は1980年代当時の免疫学からすれば異端だった。米国で過ごした10年弱の研究生活でも懐疑的な目を向けられた。転機になったのは、細胞の存在を証明した90年代後半以降だ。この細胞の発生や機能を担う原理を2000年代に解明して常識を覆したといえる。

受賞に結実したのは、優れた洞察力に基づく信念で地道に検証した努力の結果だ。周囲の声を恐れず、道なき道を切り開いた不屈の精神に敬意を表したい。

受賞決定は、国家の枠を超えて学ぶ大切さを再認識できた面でも意義深い。坂口さんの研究生活を早い時期に支えたのは米国だ。ノーベル賞を機に、互いの知を共有する国際協調の尊さに改めて思いを巡らせたい。

米国はトランプ政権の誕生をきっかけに、自国第一主義が台頭した。内向き志向を強め、科学者ら人材の往来を自ら妨げる。疾病対策など各国が抱える難題は、人材交流で培う知があってこそ解決に近づくと理解すべきだろう。科学技術力が低下する日本では、グローバルな競争で生き残るため、企業だけでなく、大学も自らの実利を追う研究に力を入れるようになった。「すぐに役立つか」ばかりが問われ、自由な発想を花開かせる機運がしづつある。国との競争力を高める意識とともに、好奇心から芽生えた基礎研究が革新の礎を築くというもう一つの原則も忘れてはならない。

山中氏「幅広く医学に貢献」～坂口氏に祝意～

ノーベル生理学・医学賞が坂口志文・大阪大栄誉教授(74)に贈られることが決まった6日、2012年に同賞を受賞した京都大IPPS細胞研究所の山中伸弥教授は同研究所のX(旧ツイッター)で祝意を表し、「免疫学における常識を覆され、自己免疫疾患やがん、さらには臓器移植など、幅広く医学に大きく貢献されました。ご業績に心から敬意を表します」などとするコメントを発表した。

II 北川 進 京大教授 ノーベル賞受賞 化学賞

スウェーデン王立科学アカデミーは8日、2025年のノーベル化学賞を京都大学の北川進特別教授(74)ら3氏に授与すると発表した。狙った物質を内部にとじ込められる「金属有機構造体(MOF)」の研究が、脱炭素や有害物の除去など幅広い産業の発展に寄与することが評価された。



記者会見する京都大学の北川進特別教授

授賞理由は「金属有機構造体の開発」。

北川氏のほか、オーストラリアのメルボルン大学のリチャード・ロブソン氏(88)、米カリフォルニア大学バークレー校のオマー・ヤギー氏(60)の3人の共同受賞となった。

北川氏は8日、スウェーデン王立科学アカデミーとの電話で「私の夢は、空気を捕獲して分離し、例え二酸化炭素(CO₂)や酸素や水などを得ることにある。空気は再利用できる。このサイクルは、私たちの社会にとっても、また私たちの惑星にとっても非常に重要だ」と話した。

同日、京都大学で開かれた記者会見では「私は新しい機能を持つ材料開発に取り組んできた。新しいことへのチャレンジが科学者にとっての醍醐味だ。つらいこともいっぱいあるが過去30年以上楽しんできた」と喜びを語った。自身の研究人生について「科学と一緒に進めてきた同僚、学生、博士研究員の皆さんに感謝したい。理解して支えてくれた家族にも感謝している。私はいい環境に恵まれた」と振り返った。

MOFは気体などの分離、回収、貯蔵を効率化できる技術として世界で研究が加速し、産業応用が広がっている。微細な穴が無数に開いていて1グラムあたりの表面積はサッカーコートに匹敵する。狙った物質を大量にとじ込められる。果物の鮮度維持や半導体製造向けで実用化しているが、今後、期待されるのが脱炭素分野での応用だ。工場で出る排ガスや空気が含むCO₂を分離・回収できれば、温暖化ガス排出を大幅に減らせる。ただ、現在の手法はコストが課題となっている。MOFは製造が簡単なうえ、目的の物質が内部の微細な穴に入り込むように設計できるため、低コストで効率的に分離・回収が可能になるとされる。

北川氏は1992年に密度が高い結晶材料を作ろうとし、逆に無限の穴が開いた不思議な構造をつくることに成功した。同氏はこの研究を「ターニングポイント」と語る。

97年には水分を除去するとガスを貯蔵できる金属有機構造体を発表した。各国で研究が盛んになり、脱炭素への応用に道を開いた。

日本人の化学賞受賞は19年の吉野彰・旭化成名誉フェロー以来で、計9人になった。「お家芸」といえる日本の化学研究の系譜に、新たな金字塔が加わった。

化学物質をつくるには、熱を加えたり、触媒で反応を促したりする必要があった。北川氏の成果である金属有機構造体は物質の分子と分子の間に働く力を利用する。材料を混ぜ合わせるだけで、分子が自然に組み上がる。できた物質の内部は微細な穴が無数に開いたかご状になっており、狙った物質だけを自在にとじ込めることができる。物質の分離や貯蔵に使え、環境やエネルギー、材料、創薬など幅広い応用が期待できる。北川氏はスタートアップを設立し、ガスの貯蔵など実用化に向けて取り組んでいる。

共同受賞者オマー・ヤギー氏の成果は、砂漠地帯で空気中の水分を集めて飲み水に使う装置の開発に生かされている。このほかにも、二酸化炭素(CO₂)の回収や脱炭素燃料の水素の貯蔵に利用しようと世界中で研究が進む。気候変動という世界が取り組むべき課題を解決する可能性を秘める。

化学の力はイノベーションのカギを握る。医薬品や化学原料だけでなく、自動車、電機など多くの産業で、素材の優劣が製品の競争力を左右する。成長が期待される脱炭素産業にも欠かせない。

化学賞の受賞者には、故・福井謙一氏や白川英樹氏、野依良治氏、鈴木章氏らがいる。いずれも産業界との連携に熱心で、研究成果の技術移転が進み、多くの人材を生み出してきた。産学連携が日本の化学力の源泉だった。一方で研究力は落ち込みが目立ち、研究現場の活気を反映する論文の発表数は低迷している。

世界の研究者に数多く引用される評価の高い論文の数では、日本は10位台半ばに落ち込んだ。化学分野に進む学生の数も減少が続く。注目は人工知能(AI)や量子技術、生命科学に集まる。化学という地味だが、日本の生命線となる強みを生かし続けるには何が必要か。政府や大学の関係者は熟慮のうえ対策を講じるべきだ。